

令和元年5月29日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02212

研究課題名(和文) 近世～近代における風土記研究と郷土意識に関する研究

研究課題名(英文) Study on the acceptance of Fudoki and the consciousness to local areas in the early modern and modern times

研究代表者

兼岡 理恵 (KANEOKA, RIE)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：70453735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、奈良時代に編纂された地誌・風土記が、近世～近代にかけてどのように享受・研究されたかを辿るとともに、そのような風土記享受の背景にある、近代における「郷土意識」との関連性を検証したものである。

その成果として、契沖、今井似閑、谷森善臣などによる近世における風土記研究の解明、また近世「国学」から近代的「国文学」が立ち上がる中、多くの研究者が風土記の文学的価値を認めない中、芳賀矢一が風土記を高く評価していること、それはのちの日本民俗学樹立にも連なるものであったことを指摘した。さらに戦中における郷土愛・愛国心と風土記への関心について、その関連性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの風土記研究は、各国風土記ごとの注釈・解釈にとどまり、風土記研究の全体像を研究「史」として検証したものは皆無であった。それに対し本研究は、それらの「点」と「点」を「線」に繋ぎ、風土記研究を立体的に浮かび上がらせたものである。また近代日本における郷土意識の研究は、歴史学を中心に行われてきたものの、風土記研究の視座からはほとんど見られなかった。

特に2011年の東日本大震災以降、地域の絆や郷土資料の保存の必要性が強く叫ばれる昨今、風土記の享受史を通じて、「風土」「郷土」とは何か、という課題に一つの答えを導き出す本研究は、きわめて今日的かつ意義あるものである。

研究成果の概要(英文)：Fudoki is the oldest geography which was compiled in the Nara period. In this study, I researched how Fudoki was accepted and studied and how the interest in Fudoki related to the consciousness to the local area in the early modern and modern times.

As a result, I clarified the study of Fudoki by scholars in the Edo period (Keichu, Imai Jikan, Tanimori Yoshiomi), and pointed out when the method of the study of Japanese literature was established in the early days of the Meiji era, most scholars found no literary value to Fudoki, on the other hand, Haga Yaichi, who was the scholar of Japanese literature, was interested in Fudoki from the point of view of local legend and folk tales. His interest was linked to the establishment of folklore in Japan. In addition, I evaluated the relationship between "local love" and the interest in Fudoki during war in the early days of the Showa era.

研究分野：日本文学

キーワード：風土記 享受 近世 近代 郷土意識

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

風土記は、和銅6年(713)の官命によって編纂された日本最古の地誌である。しかしその研究は、同時代文献である『古事記』『日本書紀』『万葉集』に比し、立ち後れている。また本研究開始直前の2013年には、風土記撰進官命1300年として、各地方自治体におけるイベント(「常陸国風土記1300年記念フォーラム&フェスタ」茨城県、「風土記1300年記念・播磨国風土記」播磨広域連携協議会など)や、風土記関連の展示・シンポジウムが開催されたが、その後、継続的な取り組みが行われたとは言えず、風土記に対する一般市民の認知度も必ずしも高くない。その原因として、次のような点が指摘できる。

- (1)現存写本に恵まれず、まとまった形で残る五カ国(常陸・播磨・出雲・肥前・豊後)も、出雲以外は部分的にしか残っていないこと
- (2)本格的な研究が開始されたのが近世以降であり、写本のみで未翻刻・未刊の注釈も多いこと
- (3)地方に関する文献のため、その地以外での関心が薄く、在地における研究成果も他の地域では入手しにくいこと

### 2. 研究の目的

本研究は、上記1のような背景をふまえ、風土記の本格的な研究が始まった近世～近代において、その研究が深化していく過程を立体的に浮かび上がらせること、地域における風土記の伝播・受容を明らかにするとともに、近世後期から近代にかけて高まる「郷土意識」と風土記への関心の関連性について探究すること、を目的とする。具体的なテーマは以下の3点である。

- (1)近世後期～近代における風土記研究史の具体的解明
- (2)各地域における風土記テキスト・研究の伝播・受容の探究
- (3)近代日本における「郷土意識」生成過程の追究 風土記研究の視座から

これまでの風土記研究は、各国風土記ごとの注釈が主であり、風土記全体の研究を研究「史」として検証したものは皆無であった。それに対し本研究は、それらの「点」と「点」を「線」に繋ぎ、風土記研究を立体的に浮かび上がらせることを目指した。本研究従事者(兼岡)は、風土記編纂時の奈良時代から近世にいたる受容の諸相を探究し、その成果を『風土記受容史研究』(笠間書院 2008)としてまとめている。本研究はこの成果の継続として、近世末～近代の風土記研究史を追究するものである。

また近代日本における「郷土意識」生成の研究は、歴史学を中心に従来から行われているが、風土記享受という視座からの研究は、これまで殆どなされていなかった。

2011年の東日本大震災以降、地域の絆や歴史資料の重要性がこれまで以上に叫ばれるようになる中、本研究は、地域の活性化や町おこしにも重要な示唆を与えるものである。

### 3. 研究の方法

本研究は、文庫・図書館等における資料調査、風土記関連地の実地踏査を主たる方法とする。具体的には、以下の通りである。

- (1)近世における風土記研究・享受に関する資料調査(風土記逸文収集を初めて網羅的に行った書である今井似閑『萬葉緯』、似閑の師匠である契沖の風土記に関連する著述を中心に)
- (2)近世末～近代における風土記写本の伝播・享受について(『播磨国風土記』写本伝播の契機となった谷森善臣の『播磨国風土記』研究を中心に)
- (3)近世末～近代(昭和初期)における「郷土」意識と風土記享受・研究に関連する言説の収集・分析

### 4. 研究成果

本研究の成果として、主に以下の4点が挙げられる。

- (1)近世における風土記享受の一端の解明
- (2)近代における風土記享受から「郷土」意識について
- (3)近代的「国文学」研究が立ち上がった明治初期における風土記享受について
- (4)研究成果の海外への発信

(1)については、はじめて風土記逸文を体系的に収集した今井似閑(1657-1723)による『萬葉緯』の分析を通じて、当時における風土記伝播、および似閑自身の風土記研究について明らかにした(「今井似閑『萬葉緯』-風土記研究史上の意義」 5,「雑誌論文」)。また近世末、『播磨国風土記』写本伝播の契機を作った谷森善臣について、その『播磨国風土記』研究の一端を考察した(「幕末～明治期における『播磨国風土記』研究 - 谷森善臣を中心に - 」 5 [学会発表])。

また(2)については、昭和初期～戦時下における「郷土」さらに「愛国」意識の高まりの中で、風土記が古代に編纂された「日本最古」の地誌として、その編纂自体が称揚されていったこと、さらに「郷土愛」を唱えつつ各地域で風土記研究が行われたことを検証した(「風土記から見えるもの - 地域へのまなざし」 5,「雑誌論文」)。

さらに(3)として、近世「国学」から近代的「国文学」が立ち上がってきた明治初期、ドイツ文献学を学び近代的国文学を樹立したとされる芳賀矢一が、ドイツの郷土研究やグリム童話への関心と連なる形で、日本の地方伝説である風土記に高い価値を認めていることを明らかにした(「芳賀矢一と風土記」 5,「図書」)。

そして(4)として、これらの成果を、海外における学会・招待講演等において、積極的に発信

した( 5「学会発表」「その他」)。

以上のような成果をあげる中で、さらに探究すべきテーマとして、主に以下の二点が浮かび上がってきた。

(1)19世紀末～20世紀初頃、近代的な国文学研究における風土記享受

(2)同時期における外国人日本学研究者の風土記享受・研究について

このような近代における国内/外における風土記享受・研究の考察を通じて、風土記を通じてみた「地域」へのまなざしを、さらに探究することが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

兼岡理恵「今井似閑『萬葉緯』 風土記研究史上の意義」(『風土記研究』第41号 2019年 査読・無 9-23頁)

兼岡理恵「異界との交通 海幸山幸神話を中心に」(『比較国際日本学教育センター研究年報』第13号 2017年 査読・無 18-25頁)

兼岡理恵「風土記から見えるもの - 地域へのまなざし」(『史学論集』第47号 査読・無 2017年 1-11頁)

兼岡理恵「オケ・ヲケ「詠辞」にみる「地域性」 『播磨国風土記』美囊郡志深里条を中心に」(『古代文学』第55号 査読・有 2016年 52-60頁)

兼岡理恵「契沖と風土記」(『国語と国文学』93巻1号 査読・有 2016年 38-54頁)

兼岡理恵「風土記の「視点」 中央と地方のはざままで」(『文学・語学』第212号 査読・無 2015年 74-84頁)

[学会発表](計5件)

兼岡理恵「風土記逸文 今井似閑『萬葉緯』をめくって」(第16回風土記研究会大会シンポジウム「風土記を書いた人々」2018年)

兼岡理恵“Words Representing Borders: Hashi (Bridge) and Saka”(EAJS2017 Conference in Lisbon 2017年)

兼岡理恵「異界との交通 海幸山幸神話を中心に」(第18回国際日本学シンポジウム「イメージの伝達と国際日本学」お茶の水女子大学 2016年)

兼岡理恵「風土記歌謡の地域性を問う オケ・ヲケ「詠辞」を中心に」(古代文学研究会夏期セミナー 2015年)

兼岡理恵「幕末～明治期における『播磨国風土記』研究 谷森善臣を中心に」  
(古事記学会例会 2015年)

[図書](計4件)

兼岡理恵「『風土記』はどのように読まれたのか」(『古典文学の常識を問う』(共著) 勉誠出版 2019年刊行予定)

兼岡理恵「芳賀矢一と風土記」(万葉七曜会編『論集上代文学』第38冊(共著) 笠間書院 2019年刊行予定)

兼岡理恵「風土記からみる律令・国司 編纂と享受の視点から」(古瀬奈津子編『律令国家の理想と現実』(共著) 竹林舎 2018年 470-494頁)

兼岡理恵「『古事記』海幸・山幸神話 「海原」という世界」(鈴木健一編『海の文学史』(共著) 三弥井書店 2016年 16-29頁)

〔その他〕

【招待講演】

兼岡理恵「異界をつなぐもの 日本古代文学における「境界」表現」(Universität Hamburg, Asien-Afrika-Institut, Universität Hamburg 2018年)

兼岡理恵 “Conceptualizing Deities and Nature in Ancient Japan”  
(Asian Studies 4th Japanese Studies Lecture Series University of Cincinnati  
2016年)

兼岡理恵「風土記から見えるもの - 地域へのまなざし」(駒澤大学大学院史学大会 2016年)

【寄稿】

・兼岡理恵「その後の『風土記』 『風土記』をめぐる人々のものがたり」  
(『別冊太陽』268号 2018年 142-144頁)

【新聞取材】

・産経新聞大阪本社版 2018年12月21日記事「地方に息づく神と王の物語」

【書評】

・兼岡理恵「書評 エドウィーナ・パーマー著『英訳 播磨国風土記』」  
(『風土記研究』第39号 2017年 51-57頁)

【事典項目執筆】

・兼岡理恵「風土記の世界」(『日本思想史事典』丸善出版 2019年刊行予定)

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。